晩春日記

牧野信一

青空文庫

（四月――日）

また、眼を醒すと夕方だ。とゞけてある弁当籠を開いてウヰスキーを二三杯飲むと、はつきり眼が醒る。鰯には手が出ない。セロリを噛む。

手紙を書くので明方までかゝつてしまつた、春の晩、灯の下で手紙を書く――これは、いくつになつても余の胸を和やかにさせる、春になると君は手紙を寄す人だ……などゝ云はれたことがある。

（次の日）

眼を醒すと、また夕暮時だ。

机の上に鉛筆の走り書きで、妻の言伝が乗つてゐる。その一節「今Bさん達がお見えになつたので此処に案内して来たのですが、どうしてもあなたは起きません。」

Bの走り書の一節「フクロ！」

Bの妹さんの走り書き「諒闇中だから雪洞はともさないんですつて、夜、来たつて駄目よ、もうそろ〳〵散りかゝるわ！」

B――「だが、この儘そつと帰つてやらう、夜来るかも知れない。」

Bの妹さん――「あたしは、さよならよ。」

妻――「あまり勉強すると毒よ。」

（その次の日）

Bに起される。

「銀座へ行かないか、これから――」

「東京の？」と余は訊ね返した、「いくら急行何とかゞあると云つたつて、厭に東京を近くしたがりアがるな。」

「ぢや、止さう。ぢや撞球屋へ行かないか。」

「何年にもキユーをさはつたこともない。」

「俺のうちへ行かないか。」

「これから？」

「何時だらう？」

「俺は時計を持つてゐない。」

「俺も――」とBも云つた。

見て来るとBは云つて外へ出て行つた。小一時間もかゝつて漸く彼は戻つて来た。「おい、冗談ぢやない、もう一時過ぎだぜ、どこもかもみんな寝てゐる――停車場の近くまで行つてやつとこれを探して来た。」

Bは、ふところからアスペルの鑵とカマボコを取り出した。

「おい、そこら辺に紙の皿があつたな、あれを出さないか。」

「弁当籠にいれて返してしまつた。」

……「何だか、あたりが直ぐに静かになつたやうだつたが、して見ると俺がやつて来た時刻も早いわけぢやなかつたんだな。」

「さうかも知れないね……眠くなつたか。」

「朝まで話して行くよ。」

「俺になるぞ、あしたから……」

「関はない、——験べかけてゐるものがあるんだが、それを此処へ持つて来ても好いか。」

「君さへ好かつたら……」

「学生時分とさつぱり変らないことになつてしまふね、試験勉強気分だね。」

余は、悲しさうに頬笑みながらBの前にあるウヰスキー・グラスを指差した。するとBも、頬笑んだかと思ふと、この時まで息も切らずに喋舌つてゐたのを、稍暫し眼を伏せたが、突然わけもない声を張りあげながら、盃を執り、余のそれにプロージツトして——そして余等は見事に盃を干した。

（次の夜）

妻が、今夜は久保田さんのラジオがあるからといふことを告げに来た。暫く振りで妻の方へ行つて晩飯を食べようといふことになつてBと出掛ける。

Bの妹さんも居た、余の母もゐた、Bと、余とそして余の妻と、みんなでラジオを聴く。B

は、久保田万太郎の好き読者である。声を聴くのは初めてだと云ふ。
「ほう！　彼は、三十九かね、もう！」などとBは呟く。
「あたし、もう先からそれ位ゐの齢の人かと思つてゐたわ。」とBの妹。
「馬鹿！　手前えなんぞに何が解る……」Bは、熱心に聴いてゐた。
ラヂオのお花見だ。Bは、ボートの選手をやつたことがある。
Bもヨロ〳〵、余も怪しき脚どりで、眠くなりかけたらしい彼女等をそこのバラツクに残して、二人で去る。提灯をさげる。肩を組んで田甫道を帰る。――「薄紫きのアーク灯！」「ガスとボンボリ鶴の群――」「石油エンジンコト〳〵と」「タイワン館のシイナの子――だ。」「シヨンボリ立つた後ろから馬鹿バヤシ――か？」
一句一句が切れ〳〵にしか口に出ない、闇雲にところどころ思ひ出す白秋の「ルナパーク」をBは、ひとりであらん限りの声で叫んだ。
「かうして俺は、ころがし廻る、この樽を、デイオゲネス聖者のやうに、この樽を、真面目かと思ふと冗談で、冗談かと思ふと生真面目で、あれからこれへ、これからあれへ、あてがあるやうで、あてがなく……」とBは歌つた。
「何の歌だ、それは？」
「デイオゲネス先生の樽のやうに――」
「もう直ぐだよ、あまり大声は止せよ。出たらめはもう止さうよ。」と余はBを支えた。

「憎しみからと思へば愛情（イトシミ）で……さうかと思ふと憎しみで」
「おい、変な即興歌は御免だよ。」
「俺の歌ぢやないよ、それはヨハンの――」
「ヨハン？」
「さうだ。文句はちつたあ違つてゐるかも知れないが、これはヨハンの歌だ、ヨハンが作つた歌なんだ、ヨハン・オルフガング・ゲイテの……」
（次の日）
また夕暮時に――。
（その次の日）
また――。
あまり勉強すると毒ですよ――と、また妻が書いて行つた。鉛筆で、紙の皿の隅に。

青空文庫情報

底本：「牧野信一全集第三巻」筑摩書房
　2002（平成14）年5月20日初版第1刷
底本の親本：「随筆　第二巻第五号（五月号）」人文会出版部
　1927（昭和2）年5月1日発行
初出：「随筆　第二巻第五号（五月号）」人文会出版部
　1927（昭和2）年5月1日発行
入力：宮元淳一
校正：門田裕志
2011年7月14日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

晩春日記

牧野信一

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

URL　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　https://aohelp.club/
BiliBili　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/